

「生きる力」をはぐくむ教育の新たな展開

# 初等 教育資料

編集：文部科学省教育課程課／幼児教育課

12

ISSN 0446-5318

NO.868 DES.2010

平成22年度臨時増刊

MENTA 初等教育資料12月号  
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1 文部科学省印刷局印刷



—平成22年度版—

## 幼稚園教育年鑑

平成22年度幼稚園教育の動向及び平成21年度研究集録

## 学校法人金城学園

### 1 研究テーマ及び研究の観点

#### (1) 研究テーマ

幼保連携型認定こども園における学校評価の推進の在り方について

#### (2) 研究の観点

ア 自己評価項目・指標等の検討と評価実施体制の構築

幼稚園機能と保育所機能を一体的に評価するための評価項目・指標等について、利用する保護者や子どもの状況が多様であること、地域子育て支援事業の実施、0歳から5歳までの乳幼児が通うなど認定こども園の目的や特徴(事情)を踏まえ多岐にわたる検討を行い、評価項目・指標等を設定し自己評価を行った。さらに、幼稚園教員や保育士等が組織的に自己評価を行うための体制づくりについて検討を行った。

#### イ 客観性を高めるための学校関係者評価の実施

自己評価を基に学校関係者評価を行い、その結果を公表・説明することにより、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による地域に根ざした学校(認定こども園)づくりを進めた。

### 2 地域の概要

地域の範囲 (市区町村名)	人口	幼稚園		小学校		保育所	
		幼稚園数	幼児数	学校数	児童数	保育所数	幼児数
南魚沼市	千人 62	園 (国) 0	人 0	校 (国) 0	人 0	園 (公) 24	人 1,731
		(公) 1	51	(公) 20	3,665	(私) 3	149
		(私) 2	142	(私) 0	0		
		※私立のうち1園は幼 保連携型認 定こども園				※私立のうち1園は幼 保連携型認 定こども園	
合計	62	3	193	20	3,665	27	1,880

(平成20年5月1日現在)

市内に幼稚園は3園あるが、少子化の影響で定員充足

率は約60%となっている。しかし、充実した幼児教育を受けさせたいという保護者ニーズもあり、より良い幼児教育の実践に向けて努力を続けている。平成17年本園が総合施設モデル事業を受け、平成20年4月、新設の金城保育園と合わせて幼保連携型の認定こども園が誕生した。

### 3 研究協力機関

社会福祉法人若葉会 金城保育園(認定こども園):わかば保育園(3歳未満児専用所規模保育所)

### 4 研究の内容及び方法

#### (1) 学校評価の概要

当園では、平成20年度新潟県私立幼稚園協会が文部科学省から委託を受けて実施した「幼児教育の改善・充実調査研究事業」の研究園として、「幼稚園における学校評価ガイドライン」を踏まえた「幼稚園の学校評価の推進の在り方」調査研究に取り組んだ。

その過程で、幼稚園機能での評価に加え、新たに認定こども園として加わった保育所機能の評価項目の設定や評価の体制づくりをどう構築するかなど新たな課題が浮き彫りとなり、「幼稚園における学校評価ガイドライン」だけでは対応することができないなど、様々な課題を把握することができた。

平成21年度は、「幼稚園における学校評価ガイドライン」やこれらの課題を踏まえ、認定こども園における評価のあり方について、特に以下の視点での取り組みを通して、認定こども園における学校評価の手法やその体制等について明らかにし、研究成果を広く普及することにより、認定こども園における教育・保育の水準の向上に資することができると考えた。

#### ア 自己評価項目・指標等の検討と評価実施体制の構築

幼稚園機能と保育所機能を一体的に評価するための評価項目・指標等について、「保護者や子どもの状況が多様」「地域子育て支援事業実施」など、認

定こども園の目的や特徴を踏まえつつ検討した。通常業務の中で継続して取り組めるよう精査し、評価項目・指標等を設定して自己評価を行った。さらに、組織的に自己評価を行うための体制づくりについて検討し、教職員の意識の共有化をはかった。

#### イ 客観性を高めるための学校関係者評価の実施

自己評価項目・指標等の検討と評価実施体制の構築並びに客観性を高めるために、自己評価を基に学校関係者評価を行った。その結果を公表・説明することにより、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めることを目指した。

#### (2) 学校評価体制の概要

平成21年度は3つの委員会を設置し、幼稚園教員や保育士等が組織的に自己評価から学校関係者評価・公表までの学校(認定こども園)評価を行うための体制づくりについて検討協議を重ねた。

- ・実行委員会「認定こども園の学校評価の課題を検討・協議」(5回開催):委員:神長美津子東京成徳大学教授、鈴木美子東京福祉大学准教授、渡邊英則ゆうゆうのり幼稚園長、若井利信塩沢小学校長:園内委員:幼稚園長・保育園長・わかば保育園長・総括主任・担当者(1名)
- ・運営委員会「認定こども園の学校評価を検討・精査」(5回開催)委員:鈴木美子東京福祉大学准教授:園内委員(実行委員会と同じ)
- ・園内委員会「資料の分析・作成等の実務」(7回開催):委員(実行委員会と同じ)を組織し必要に応じて開催した。

#### (3) 第一回自己評価項目(指標)の検討

(平成20年度自己評価項目の再検討)

今回、特に重視した項目は、「3歳未満児の保育の在り方」と「地域における子育て支援」である。

3歳未満児の保育の在り方については、養護の考え方および3歳未満児の発達についての理解を深めるために、保育所保育指針を基に再検討し、より細かな配慮が必要な場合は項目を追加した。

地域における子育て支援については、認定こども園の必須事項であり、地域に根差したものになっているかどうか確認するため設問をわかりやすくするよう再検討し、必要な項目を追加した。

具体的な設問内容は、一つの設問から様々な保育の場面が思い起こされ、振り返ることができるよう、項目をチェックするだけでなく、大項目ごとに、「よく出来ていること」「課題とあったこと」を簡条書きにした。

#### (4) 第一回自己評価の実施並びに分析・まとめ

第一回目の自己評価は、7月末から8月初旬に行った。認定こども園に関わりのある全職員(幼稚園教諭・保育士・栄養士・事務・児童指導員)を対象に行った。「幼児とのかかわり」等職種によっては書き込めないところは、読んで確認するだけでも行った。

第一回目の自己評価の結果を集計・分析・まとめてみたところ、園で様々な活動を実施していても、他と比較することなどが少ないため、正しく評価できずに自分の保育に自信が持てない傾向が高いことがわかった。教育課程の中に定着しているがゆえに、その意義について改めて考える機会が少なかったようである。

延長(預かり)保育・一時保育は、評価項目に載っていないことにも気づき追加することとした。

分析・まとめは、自己評価の記述部分の「よく出来ていると思ったこと」「これからの課題とあったこと」を中心に分析し、担当者が気づいたことをまとめ、園内委員会等で検討し全体のまとめを作成していった。

#### (5) 意識の共有化①(自己評価の分析・まとめ報告)

全職員の意識の共有化をはかるため、夏の園内研修会で、担当者より自己評価の分析結果やまとめを基に中間報告をした。自己評価の実施により、全職員が園の全体像を理解する機会となり、具体例の記入により日々の業務の振り返りも出来ていた点について、実行委員会で評価して頂いたことを伝えた。

また、担当者から当園で日常の保育に取り入れている地域の自然や社会とのかかわり(未満児保育園・学童保育児童・高校生や高齢者との交流・スキー教室・子ども料理教室)は日常の保育として当たり前に行っているため自己評価が低い傾向があること、研修や研究等についても同様であることを伝えた。

毎日の保育の中での気づきを大切にしないと評価から改善へつながらないことがわかり、もう一度自分たちの保育を振り返る必要性を感じ保育者は毎日「振り返りノート」に自らの気づきを書きとめることにした。

#### (6) 先進園の協力

園単独の取り組みでは、評価項目(指標)が偏ってしまうことや、適正な自己評価に結びつかないことも予想される。自園での取り組みを再確認するために、地域性や規模の異なる横浜市・ゆうゆうのり幼稚園(渡邊英則園長)の協力を得た。

#### ア 方法

実施依頼前に、園内・運営委員会を開催して評価項目について再確認し、質問の意味がわかりづらい項目や不必要な項目を整理した。

9月上旬、訂正した自己評価チェックリストにて

自己評価の実施を依頼した。

10月下旬、結果を分析・項目ごとにまとめた詳細な報告を得た。「評価項目の点数より、自分で考え、出来ている・課題と思うことの記入が重要である」「保育者と子どもの関係だけでなく、クラスとしての集団を育てるには子ども同士の関係も大切である」「特別支援の子どもたちへの配慮」「地域性や園の特色を確認する項目があるとよい」等の意見をもとに、評価項目を再検討することにした。また、自己評価を活かすポイント（具体例を書き出しイメージ化すること：自己評価した後全員で前向きな話し合いをする等）についても指導頂いた。

(7) 第二回自己評価項目の検討

第二回（最終版）自己評価の項目は、「地域の自然や社会との関わり」に「地域性を生かした保育の展開」という中項目を追加した。

各評価項目は項目（指標）の意図がわかるように心がけ、重複するような項目がないか、園内・運営・実行の各委員会で確認し、記述項目には、「よく出来ていること」、「課題と思ったこと」だけでなく「具体例」を書き込むようにした。

(8) 第二回自己評価の実施並びに分析・まとめ

第二回自己評価は、前回同様全職員を対象に12月初旬に行った。評価結果を集計・分析・まとめた（園内委員会にて）ところ全体的に評価の点数自体は向上している事がわかった。具体例等の記入も、実際の保育内容と関連づけられるようになり、夏の職員研修会における意識の共有化や、振り返りノートの記録によって気づきが深まった事がうかがえた。

実行委員会で結果の分析・まとめを報告したところ、委員の方から園で実施している様々な取り組みに対して、「教職員の自己評価は低すぎる」「もっと自信を持って肯定的に評価してもよい」など前向きとなる意見を頂いた。そこで冬の職員研修会では、自己評価の実施を通して教職員がさらに前向きな発想を持てるよう、「よく出来ていると思うこと」や「気づいたこと」を中心にグループディスカッションを行うことにした。

(9) 意識の共有化②

（グループディスカッションの実施と効果）

冬の職員研修会におけるグループディスカッションは、4つの大項目「保育の計画性」「保育の在り方、幼児への対応」「保育の在り方、3歳未満児への対応」「保育者としての資質や能力・適性」に絞り、職員の意見を確認し、グループ分けをした。約1時間のグループディスカッション後に、グループごとにまとめた発表を行った。どのグループでも前向きな話し合いが行われ、一つひとつ

の評価項目を確認し合う中で「自己評価に取り組むことで、園業務について理解していない事も多かったと気づいた」「評価はそれだけで終わるのではなく、努力すればよい結果もついてくるとわかった」「他の職員の良いところを素直に言葉に出して確認し合う機会となった」「互いの良い所を認め合い、高め合う雰囲気を大切にしたい」「全クラス複数担任制や他施設との交流等、自園のよいところに改めて気づいた」等の話し前向きな話し合いがなされた。

この話し合いを通じて、職種や経験年数の垣根を越えて、職員同士で互いの良いところを確認し、他にはない自園の取り組みとその価値を再確認することができた。日常の業務の中ではなかなか話題にできなかった事まで踏み込んで話すことができ、自分達の保育について「各自の振り返り」と「全員で共通認識」を持つ貴重な機会となり、短時間ではあったが十分な成果を上げることができた。

(10) 自己評価シート（最終版）完成

第二回目の自己評価のまとめと分析を行いながら、園内委員会・運営委員会・実行委員会で評価項目（指標）の文言の訂正や小科目の追加・中科目の移動を行った。

大項目は8、中項目は3から6、小項目は1から8の合計127項目となった。

5 研究の成果及び今後の課題

(1) 研究成果

ア 自己評価項目・指標の検討と評価体制の構築

(ア) 幼稚園機能と保育園機能を一体化して運営する認定こども園としての自己評価項目・指標の作成

平成20年度当初の自己評価は、「私立幼稚園の自己評価と解説」（全日本私立幼稚園幼児教育研究機構）を基に行った。「養護」の視点や乳児期からの発達の連続性および子育て支援に関する項目が不足している部分の追加訂正並びに幼稚園機能と保育所機能や地域の子育て支援事業など、それぞれの違いを克服しながら整理する必要があるため、目的や特徴（利用する保護者や子どもの状況が多様であること）を踏まえ、一体的で無駄のない評価項目（指標）となるよう、何度も園内・運営・実行各委員会で検討し、さらに先進園からの協力を得て、評価項目（指標）等を設定し自己評価を行い、その結果を基に再度訂正や修正を加えた。

また、一般の教職員と指導的立場では、保育に対する視点も異なるため、それぞれ別のシートを

作り、設問の趣旨を理解しやすいように心がけた。

評価項目でわかったことを「よく出来ていること」「課題と思ったこと」や「具体例」を記述することでより具体的なイメージを持てるようにした。

(イ) 通常業務の中で継続して取り組める、簡易な自己評価項目の精査

多岐にわたる業務内容を確認しようとする膨大な項目数になってしまう。今回は平成20年度当初と比較し約3分の1の項目で実施することができた。自己評価は継続してこそ意味があり、保育の現場に合わせて無理のない内容でまとめることを心がけた。一つひとつの項目の文言について話し合う中で、自園の保育において大切にしたい点について、委員会メンバー間で共通理解を深めることができた。自己評価の結果を分析することは、研究担当者が、各教職員の思いを把握することになり、指導の糸口ともなった。

(ウ) 教職員の意識の共有化

全教職員が互いに高めあって協力し合い、より

よい保育をするための手立てとして自己評価を位置づけた。保育者以外の職種（栄養士・事務等）には記入できない項目もあったが、一通り目を通してもらい、自己評価実施を、全教職員が園の全体を知る機会とした。

さらに各自の理解を深めるため中間報告及びグループディスカッション等を行った。評価項目が指標となり、共通の指標で全職員によるグループディスカッションを行うことができ、各職員目指すべきものが見え、それに向かってどうすべきかが明確になった。自園の保育の長所に気づき、互いに行っていることの意味や位置づけを共有できたことは大きな収穫であった。

イ 客観性を高めるための学校関係者評価の実施

(ア) 学校関係者評価の実施

自己評価の客観性・透明性を高めるとともに認定こども園・家庭・地域が園の現状と課題について共通理解を深めて相互の連携を促し、園運営の改善への協力を促進するために学校関係者評価を実施した。

学校評価年間スケジュール（例）

認定こども園 金城幼稚園・金城保育園

目安となる月	3月以前	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
評価の流れ	評価の準備・重点目標等の設定					教育活動の実践・見直し							評価・公表
評価体制の構築		委員会設置(幼・保・園長・主事)				⑨第1回自己評価集計・分析	⑩集計分析を基に研修会にて第1回自己評価のまとめを報告	⑪評価項目の検討・再設定		⑫第2回自己評価集計・分析	⑬集計分析を基に研修会にて全職員ディスカッション	⑭まとめ・公表シート作成	⑮報告書作成・公表
自己評価	①重点的に取り組む目標設定		②評価項目等の検討・設定		⑤重点的な目標等を十分考慮した教育活動	⑧第1回実施	⑩中間評価で見直した重点的な目標等を十分考慮した教育活動	⑪第2回実施					⑫理事会にて報告
学校関係者評価	③第2回委員会(関係者評価委員)	⑥学校関係者に公開し、意見交換(1・2回)						⑩第1回委員会(役割や目標説明)				⑫第2回委員会(関係者評価)	
保護者対象の活動	④重点目標等提示			⑦アンケート実施・公表				⑭アンケート実施・公表					⑮アンケート実施・公表
設置者による支援・改善	理事会・評議員会にて意見聴取		理事会・評議員会にて意見聴取					⑯理事会・評議員会にて意見聴取並びに改善案提案					⑰理事会・評議員会にて意見発表
その他	園内新採用研修	園内新採用研修	園内新採用研修	園内新採用研修	園内新採用研修	園内研究発表会						園内研究発表会	

学校関係者評価委員会は、11月中旬に組織し、12月10日と1月14日に学校関係者評価委員会を開催した。委員には、南魚沼市教育委員会管理指導主事、主任児童委員、近隣小学校長、当園OB、学校評議員、PTA会長、アドバイザーは東京福祉大学准教授とした。

第一回の委員会では、昨年度の取り組みを紹介、アドバイザーが幼児教育と小学校以上の教育課程の違い等説明、幼児教育・保育の理解と学校評価の在り方、今年度の取り組みの中間報告について説明した。

第二回の委員会では、自己評価結果公表シートや自己評価に関する集計・分析・まとめを説明し、質問を受けた後、意見聴取した。肯定的な意見が多く、保育に対する取り組みに自信と励みとなった。

この場で意見がなかった分野等の意見や感想は「学校関係者評価票」を配布し、一週間以内に回収した。評価票にも肯定的な意見が多かった。

二回の学校評価委員会では、委員に自己評価内容及び園の保育内容を十分に伝えきれない面もあった。今後の課題として検討を重ねていきたい。

三回目の発表会でさらに地域の関係者に今年度の取り組み・内容を十分理解して頂く機会となった。

#### (イ) 客観性を高めた学校評価の公表

学校評価委員会における様々な角度から意見の聴取を行うことで、客観性を高めた学校（認定こども園）評価を保護者や地域の方に公表することができた。

#### ウ 学校評価年間スケジュールの確定

1年間を通しての研究により学校評価年間スケジュールを確定することができた。

#### (2) 今後の課題

##### ア 継続の重要性

今回の取り組みにより、自己評価は継続してこそ意味があるものという事が実感できた。認定こども園の多岐にわたる業務内容をすべて確認しようとすると、項目数を絞り込むことは難しく、さらに具体例の記入も加えると、各教職員の負担が増えてしまう。今後もさらに精査して、全体を整理しつつ、年度ごとに重点項目を決めて取り組むなどの方法も検討していきたい。

##### イ 地域への発信

学校関係者評価を実施することで「自園の取り組みを、地域に向けていかに発信していくか」という視点に気づく事ができた。今後も保育について、一般の方々にも理解しやすい内容で、継続性のある情報を発信し、脈略を持った理解が得られるよう心がけたい。

##### ウ 職員の共通理解から子どもの育ちへ

自己評価により、教職員の共通理解を深めることはできたが、まだ、子どもの育ちに効果があったかどうかを十分に確認するまでには至っていない。

保育は、子どもに寄り添い、子どもの言葉を代弁すること、幼児教育は、子どものよりよい育ちをいかに援助するかが大切である。全職員共通で評価項目や指標を理解し、子ども一人一人の思いを大切にす姿勢を持ち続けていきたい。